

# 世の中へ出る子供たち

小川未明

青空文庫



正吉しょうきちの記憶きおくに、残のこっていることがあります。それは、小  
 学がっこう校を卒そつぎょう業する、すこし前まえのことでした。ある日ひ、日ひご  
 ろから仲なかのいい三人にんは、つれあつて、受うけ持もちの田川たがわ先生せんせいをお  
 訪たずねしたのであります。先生せんせいは、まだ独身どくしんでいられました。  
 アパートの狭せまいへやに住すんでいられて、三人にんがいくと喜よろこんで、お  
 茶ちやを入いれたり、お菓子かしを出だしたりして、もてなしてくださいまし  
 た。

「君きみたちの卒そつぎょう業も、だんだん近ちかづいたね。もうこれまでのよ

うに、毎まいにち日顔を合あわせることができなくなる。小原おぼらくんは、入はいる学校がっこうがきまつたかね。」と、一人ひとりの方を向むいて、おつしやいました。

「はあ、兄にいさんが、中ちゅうがっこう学校へ入はいつたらいいのですけれど。」と、小原おぼらは、下を向むきました。

「君きみのお兄にいさんは、やさしい方かただ。君きみは、もつと体からだをじょうぶにせんければいけんよ。」

先せんせい生は、じつと、早はやく両りょうしん親わかに別わかれた小原おぼらの細ほそほそ々とした体からだを見みていられました。

高たかはし橋はしは、早はやく父ちち親おやに別わかれたけれど、母ははおや親おやがあるのです。正しょうきち吉きちだけは、両りょうしん親しんがそろって、いちばん幸こう福ふくの身み。

の上であつたのです。

外には、寒いから風が吹いていました。ときどきガラス窓をガタガタと鳴らしました。

先生は、しばらくだまつていられましたが、

「みんなは、世間に名を知られるような、えらい人になれなくともいいから、正しい人間となつて、どうか幸福に暮らしてもらいたい。」といつて、うつむかれたが、そのとき、目の中に涙が光つたのです。先生のお言葉は、胸にしみて、思わず知らず、三人は、いつしよに頭を下げました。

それは、つい、昨日きのうのこのようなのが、もう四、五年ねんもたちます。小学校しょうがっこうを出てから、三人にんの身みの上うえにも、変化へんかがありません。中でもなか気の毒どくなのは、小原おぼらで、体からだが弱よわくて、中学校ちゅうがっこうを退ひきました。正吉しょうきちも、また最近さいきんははうしな年としをとった父ちち親ちおやだけとなりましたが、工手こうしゅ学校がっこうを出ると、すぐ勤つとめています。高橋たかはしは、このほどようやく工芸こうげい学校がっこうを卒業そつぎして、田舎いなかへいくことになったのです。

正吉しょうきちと高橋たかはしは、同じ種類おなじしゆるいの学校がっこうでありましたので、平へい常じょうも往来おうらいをして、自分じぶんたちの希望きぼうを物語ものがたったり、身みのまわりにあつたことなどを打ち解うけて、話し合あつたのでした。

「僕のお母さんはね、昔の芝居が好きなんだよ。だけど歌舞伎座なんて、高いだろう。それに、いく暇もないのさ。僕と妹のために、盛り場さえめつたに出られなかったのだね。僕は、お母さんが達者なうちに、すこしは楽をさしてあげたいと思うのだけれど、おぼつかないものだな。」と、ある日、高橋は、正吉に向かつて、いいました。

「しかし、お母さんは、お達者なのだろう。」  
 「ああ、病気がつてしたことがないよ。それも、二人の子供を自分の手で養育しなければならぬので、気が張っているんだね。」  
 高橋は、そう答えました。正吉は、お母さんのことを考えると、すぐ、涙が目にあふれてくるのです。

「僕も、一度お母さんを、湯治にやってあげたいと、思っているうちになくなられて、もう永久に機会がなくなってしまった。」と、正吉は、歎息をもらしました。

「しかし、君には、まだ、お父さんがあるからいい。せいぜい孝行をしてあげたまえ。」

なくなつた母親を思い出している、さびしそうなお友だちの顔を見ると、高橋は、こういつてなぐさめたのです。

もう、季節は、秋の末でありました。正吉は、高橋を見送るため、門から出ました。短い日ざしは、色づいた木立や、屋根の上に、黄色く照り映えています。

「高橋くんも、こちらに勤め口があるといいんだがな。」



正吉しょうきちは、ただ、近くちか別れるのが悲かなしかったのでした。こちらに、思おもわしい就職しゅうしょくぐち口がないので、高橋たかはしが、地方ちほうへいくのを知しっているからです。

「雪ゆきは、深くふか降ふらないけれど、僕ぼくのいくところは、冬ふゆの寒さむい田舎いなかなんだよ。大仕掛おおじかけの堤防ていぼう工事こうじなんだがね、そこへしばらくいくつもりなのだ。ただ母ははと妹いもうとを残こしていくのが、なんだか氣きがかりなんでね。」と、高橋たかはしは、いいました。

「そう長ながくは、いつていないのだろう。」

「ああ、しかし、こちらにいい口くちがあるまでは、どの途みち、しかたがないのさ。」

「きつと、そのうちにはあるよ。」

「僕たち、若いうちに、いろいろ経験するのかもしれない。」と、高橋は、肩をそびやかして、答えました。

「そうさ。僕も、満洲へいこうかと思つたんだ。しかしおふくろを失つて、間もないので、父がさびしがると思つたので、見合わせたのさ。」と、正吉は、西の紅く夕焼けした、空をながめていいました。

三

正吉は、月給の入つた翌日のこと、田舎へいく高橋のために、送別会を開くことにしました。

あるレストランで、高橋と小原と自分の三人が、夕飯を食べながら親しく話をしたのです。そのレストランは、大きなきれいな店でありました。暖房装置もあれば、壁にはオゾン発生機を備えてあって、たくさんのお客様には、それぞれ客が対い合っていました。南洋産の緑色の葉の長い植物が、大きな鉢に植えられて、すみの方と、中央に置いてありました。

正吉は、勤めるようになってから、こんな場所へは、先輩につれられたり、また社員たちときたことがあるけれど、小原も高橋も、きわめてまれなことだけに、話の合間に、頭を上げて、あたりを物珍しそうにながめていました。

「はなし、正吉と高橋の間で、いつかまたお母さんのことになつたのです。ここでも、小原だけは、母の顔さえよく覚えていなかったたので、二人の話を笑つてきくうちにも、どことなくさびしそふでありました。」

「わがままいなければ、よかつたと思ふよ。お母さんがいなくなつてから、わかつた。しかし、もう遅いのだ。よく無理をいつたり、また頼んでおいたことを母が忘れたといつて、小言をいつたりしてすまなかつた。」と、正吉はいつていました。

「僕も、悪いところではなければ、母と妹をつれていくんだけれどなあ。」と、高橋がいました。これを聞いていた、小原は、「いいなあ、君たちが、うらやましいよ。僕には、そうした思ひ

出でもない。小ちいさいときから、母ははも父ちちも、ないのだからね。」と、鼻はなをつまらせたのです。

「そう、もうこんな話はなしはやめよう。」と、正吉しょうきちが、いいました。

三人にんは、フライだのマカロニだの、いろいろ食たべたり、サイダーや、コーヒーを飲のんだりして、時計とけいが九時じを過すぎてから、そこを引ひき上げました。会計かいけいは、少しょう女じよの持もつてきた伝票でんぴょうを見みて、正吉しょうきちが、払はらつたのであります。

道順みちじゆんで、高橋たかはしが先さきに二人ふたりと別わかれました。

「出しゅつ発ぱつの日ひには、送おくるからね。」

「会社かいしゃが、忙いそがしいなら、いいよ。」

「なに、どうか都合するさ。」

あとは、小原とおぼらと正吉の二人が、星晴れのした空を、公園の方に向かつて歩いていたので。

「今夜は、ご馳走になつて、すまなかつた。」と、小原がいました。

「なんでもないよ。今度の日曜に、動物園でもいつてみない？」と、正吉が、いうと、

「お天気だったからね。」と、小原は、喜びました。そして、赤いネオンサインの方を見ながら、

「四月になつたら、また学校へ上がるつもりだ。」と、このごろ、体がよくなつたので、小原は、元気になりました。

「学校なんか、すこしくらいおくれたっていいよ、なるだけ大事にしたまえ。」

二人は、四つ辻のところで、また別れたのです。先刻から、

正吉の頭の中で、もやもやしていたものがあります。それは、

レストランの計算が、ちがっているような気がしたのでした。

なんだかすこし安すぎるので、正直な彼は、そのままにして

おけない気がして、公園のベンチのところでポケットから、手

帳と鉛筆を取り出して計算をはじめました。頭の中では、

うまくいかなかったのです。

「ああ、やはりサイダー二本がつけ落ちになっっている。これは、

あの少女の損になるのだろうか。」

正吉しょうきちが、食べ物たものや飲み物のものを運はこんできた、目の星めほしのように清きよらかな、白いしろエプロンえぷろんをかけた少女しょうじよの姿すがたを思い浮うかべました。彼はかれ急いそいで街まちへひきかえしました。そして、時計とけいを見ると、もう十時じを過すぎています。

「いつのまに、こんなに早はやく時間じかんがたつたろう。」と、つぶやきながら、例れいのレストランれすとらんの前まえへくると、もう店みせは閉しまつていました。なにか仕事しごとがあつて、一人ひとりおくれたのか、普通ふつうの娘むすめさんのようなふうをした丸顔まるがおの少女しょうじよが、横よこの入り口ぐちから、出でたのでありました。正吉しょうきちは、その少女しょうじよを呼よび止とめた。

「すこし会かい計けいが、ちがつていたのですが。」と、いいました。  
 「私わたしにはわかりませんが、なにか余計よけいにいたただいたのでしうか



。「と、少女しょうじよが聞ききました。

「いや、サイダー二本ほんの、つけ落おとしがあつたと思おもうのです。」  
 こういうと、彼女かのじよは、正直しょうじきな人ひとだと思おもつたらしく、軽かるやかに笑わらいました。

「こちらの手落ておちなんですから、かまいませんよ。」といいまし  
 た。

「受け持うもちの女じよきゆう給たまさんに、損そんをかけまいと思おもつてきたのです。  
 」

「まあ、ごしんせつに、けつして、そんなことはないんです。そ  
 れに、もう、みんなしまつた後あとですもの。」といいました。

正吉しょうきちは、そう聞きくと、いくらか気持きもちが楽らくになりました。

急いで、駅に入ろうとしたときに、夜遅く、寒いのに、外に立ちながら、花を売っている少女を見ました。やはり家のために働いているのであろうが、あまり振り向いて見るものすらありません。

「そうだ、あの金で、この少女の花を買ってやろう。」

正吉は、白い百合の花と、赤いカーネーションの花を求めました。彼は、駅の階段を上りながら、

「たとい、一銭でもまちがった金は受け取ってはなりませんよ。」

と、教えられた、お母さんの言葉を思い出しました。もうそのお

母さんは、この世界のどこを探してもいられないが、お母さんの

教えだけは、かならず守りますと、正吉は、お母さんの霊に

向<sup>む</sup>か<sup>つ</sup>て、  
誓<sup>ち</sup>っ<sup>か</sup>た<sup>の</sup>で<sup>あ</sup>り<sup>ま</sup>す。



## 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「夜の進軍喇叭」アルス

1940（昭和15）年4月

初出：「婦人朝日」

1939（昭和14）年1月

※表題は底本では、「世《よ》の中《なか》へ出《で》る子供《こども》たち」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 世の中へ出る子供たち

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>